

ロシア 東欧 経済速報

(社) ロシア東欧貿易会

2004年（平成16年）12月15日号 No. 1315

目次

● ウクライナ大統領選挙 —誤解を解く幾つかの視角—	藤森 信吉 1
● 統計速報	11
2004年1～9月期のロシアの外国投資受入状況／11	
2004年1～9月のCIS諸国のエネルギー生産／12	
● ロシア東欧貿易会関連の行事予定	13
● CIS・中東欧諸国通貨の為替レート	13

特別寄稿

ウクライナ大統領選挙 —誤解を解く幾つかの視角—

北海道大学スラブ研究センター 21世紀COE研究員

藤森 信吉

はじめに

内外の関心を集めたウクライナ大統領選挙は、11月21日の決選投票の結果、現職首相のヴィクトル・ヤヌコヴィッチ候補が49.46%を獲得し、「当選」した。ヤヌコヴィッチは、10月31日の投票で、ヴィクトル・ユーシチェンコ候補¹⁾に0.5ポイント差の2位に甘んじたが、体制側が持つ資源を総動員し、逆転に成功した（第1表参照）。

多くの者を驚かせたのは、選挙結果ではなく、選挙後の混乱である。首都キエフの独立広場には、投票日翌朝に早くもユーシチェンコ陣営による大規模な抗議行動が始まり、現在に至るまで続いている。キエフで高揚した抗議集会に、ある者は、グルジアの薔薇革命の再現を、ある者は東欧での民主化革命の再現を見る。また、欧米が選挙結果の見直しを求める一方で、プーチンがヤヌコヴィッチ当選を早々と認める光景は、かつて冷戦時代に見てきた欧米とロシアとの対立が、今まさにウクライナを舞台に展開されているようにも見える。

本稿では、紙幅の都合上、わが国のメディア報道との重複を避け、上記以外の部分で今回の大統領選挙を見る上で重要な事柄について記述する。混乱に目を奪われがちだが、今回の選挙過程・候補者、得票パターン東西ウクライナ分裂傾向といったことは、過去の選挙と多くの共通性がある。